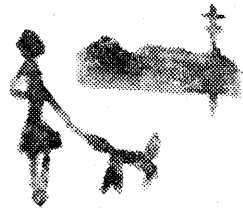


# 「童話化」について(四)



お

本 田 和 子

## 三、どのように変化して「童話」となるか。(その二)

### 2 「意図的変容」による「童話化」(その二)

文学が民衆のものとなり、印刷術が進歩する。そして、ラジオ迄が一般に進出すると童話伝承の場面が著しく変ってきた。一人の女性・一人の老人を中心として数人の子供のために物語られた「家庭の場」から、語り手は同様に一人でも数百万の児童を対象とした「社会的な場」へと、場面が移行している。

「家庭」を場とする時、変容は意図的になされたとしても、「是非この作品を児童に」とか、「これは児童に非常に好まれるに相違ないといったような、与えることに対する積極性はなく、従って、その変容も消極的になされる。即ち、「与えるならばここを改めて」といった程度に「童話化」されるのである。

「社会」を場にする時、「童話化」はぐっと、積極性を増す。「こ

の作品を是非、この時期の子供達に」という教育家や児童文学者の意志や、「これなら児童に受けること必定」という出版企業家の意図が、「童話化」を推進する源動力となる。そして、その各々に応じて、作品の選択も、変容の方向も異ってくるかもしれない。と同時に、そのどれにも共通にみられる作品選択の基準と、変容の方向がありはしないかとも思われるのである。

この、「社会」を場としてなされる「童話化」について、先ず「作家の意図の下になされる童話化」を考えよう。

童話作家とよばれる人々の中には純粹に創作だけに従事する人もあるが、翻訳・再話などをも併せて行う人が多い。それには様々な場合があろう。児童文学に対する情熱止み難いものがあり、創作だけでその意欲を充たし得ぬ場合、優れた語学の才を利用して、広く世界の名作を児童に紹介しようと思図する場合、亦、生活の資として副業に再話を行う場合などもある。この、最後の場合を除けば作品の選択にも、再話の方向にもその作家の意欲と個性がにじみ出

るものである。このような再話か、成人を対象としている作品の児童向け再話ということになれば、それは「童話化」である。こうした作品の幾つかを例にとり、それがどのような意図の下になされているか、その意図がどのような方向に表現されているかを考えてみよう。

最初に、代表的な幼年童話作家の浜田ひろすけによる「童話化」を例にとろう。「ひろすけ童話読本」の中に純粹の創作ではない再話か幾つか含まれているが、その中の「光のキス」と「赤い燈籠」と題する二篇は、アンデルセンの「絵のない絵本」の第一夜と第二夜からとったものである。そして、著者自身が序文の中で次のように述べている。

「光のキス」と「赤い燈籠」とは、アンデルセンの「絵のない絵本」から採ったもの。邦訳をお持ちの方は試みにその物語りの第二夜と第一夜とをこれに比べてみてください。わたくしがどんな風に筆を入れたか御参考になりましょう。

アンデルセンの作品の数には、童話文学の最高峯として不朽の価値を保つものであるが、この「絵のない絵本」と題する散文詩は、児童だけを対象にして書かれた童話とは、やや趣きを異にしている。傷つけることの出来ない童心の美しさを歌い、弱いものに愛憐の情を惜しまぬ彼の創作態度と、旅の体験と、豊かな想像力との結晶であるこの一連の作品は、幼い子供達の魂に働きかけ得る力を充分に具えているが、然し、これをそのまま与えるには不適當であるとし、明確に「子供に与える」という立場かう筆を加えたのがこの著者の態度である。次に文例を「赤い燈籠に」とって作品の比較を試みよう。

——アンデルセン原作

(川崎芳隆訳)

「ゆうべのこと」——これは月

が話した言葉である——「ゆっくりと、わたしはインドのすみきった大気の中をすべりながら、ガンジス河のながれる水に影を落していたのです。わたしの光がさしこもうとしていたぶあつしいけがきは、からみあうすずかけの老木からでてきていて、ちょうどかめのこうらのようにぼつてりふくれておりました。

と、その時しげみの中からかもしかみたいにも身も軽く、エツアのように美しいハインド娘がただ一人、ひよっこり姿をあらわしました。

その娘のからだつきは、なにかこう、なよなよとやさしいよ

ひろすけ童話

「お月さん、お月さん、こんばんは。話をきかせて下さいな。」  
あの遠い空から、お月さまは、ここにこしなながら、今晚もすぐに話をしてくれました。

どんな話か、きいて下さい。

南の方にインドという暑いけれども夜の涼しい国がある。私はゆうべそこまで行ってきました。①空はきれいに晴れていました。ガンジス河の水の面に私のしづかなかげは鏡のようにうつりました。河のふちには、バナナの木がこんもりと茂っていました。青黒いおもしろい葉は、かめの甲羅が重なり合っているかのように見えました。

ふと、その暗い所から、おもしろいかけな人の姿が現れました。かもしかのようにはしく、体も細くて、その人はこの世の人とはちがうように見えました。けれどたしかにこの世の人でありました。青白い草葉の上にくつきりと影を浮かせて、その人は動いていました。それはインドの娘さんでありました。

うすでありながら、まるまるとはちきれんばかりに見えたので、わたしは娘の考えを、うすいひふごしに、のそくことさえ出来そうでした。

足のぞうりはとげ草に引きさかれ、いまはたけれど、娘はぐんぐんと前の方へ進んでまいります。かわいたのどをうるおして、河からあがつてきた猛獣がおずおずかたえをかけぬけて行きます。

というのは少女の手にランプの火があかあかもえて、それをまろうと傘のようにかざしたほそい指の血がわたしの目にもいきいきうつっておりましても。

河の方に近づくと、水の上にはランプを置きます。と、それは

なんだって、暗い森の中などに、たった一人で来たのでしようか。わたくしはそれを不思議に思いました。

娘さんは野ばらの荊もかまわずに、やぶの中をふんできました。荊はくつをひっかきました。ふと、何者か、あわただしくかけ出しました。一頭の大鹿な鹿でありました。鹿は、河のそばに来て水をのもうとした時に、娘さんの足音を聞きつけたのでありました。

娘さんは別に驚きませんでした。やぶの中からあらわれました。わたくしはひとめでなにをしにそこに来たのかわかりました。②娘さんは、可愛らしい燈籠をさげていました。焔が風にあふられてちらちらすると、片手をそれにあてがいました。すると五本の指さきが灯にすかされて、赤くきれいに見えました。娘さんは河のふちに立ちました。河の水は、私の影を浮かべ

すべるように水の上を、河しもをめぐして流れていきます。ほのおが風にはたはたゆれて、いまにも消えそうに見えたのですが、でもランプはなおも、もえ続けています。そのあとを追いつながら、少女の黒い火みたいな目が、絹のような長いまつ毛の奥から、心をこめて見送っています。

もしもランプのほのおが、目に入るかきりもえつづけてくれるならば、思うひとは、まだ生きてゐるのだし、もしもその前に、消えるようなことがあったら、あのひとはもう世にいないということ、娘はよくよく知っていたからです。

でも、なおもランプはほのおをあげあげ、ゆらめいていました。心が、かつかともえて、なにかしらふるえるようなきもちです。娘はつとむぎまづき、お祈りをあげました。

かたわらの草の中には、ぬめ

て流れていました。娘さんはしなやかな体をかがめ、腕をのぼして燈籠を水の上におきました。手をはなれて燈籠はしづかに流れ出しました。焔は風に吹かれると、横になびいて消え入りそうになります。けれど、又、すぐに明るく燃えましました。娘さんは、まばたきことも、忘れたように、その目を向けて見えていました。長いまつ毛の間から、いつまでも、いつまでも、どうしてそんなに見ているのでしょうか。

河に燈籠を流してごらん。そして、その灯が見えなくなるまで消えなかつたら、兄さんはどんなに遠い所にも、この世に生きていらつしやるけれど、もし、その灯が途中で消えたなら、もうもう生きてはいらつしやらない、といううらないなのであります。③

燈籠は流れて行つて、遠く小さくなりました。娘さんは、河のふちの一つ所に膝をまげ、両手を合わせて、どうぞあの灯が消えないようにと祈っていました。

そのそばの草の中には、蛇が

ぬゆとつめたい蛇が横たわつていたのに、娘はたまたまうぐらゐーさまと、おむこさんのことしか考えていませんでした。

「あの人は生きています！」と思わずもよろこびの音が、あふれてきました。すると、いっせいに山の峯々から、こだまがかえってくるのです。

「あの人は、生きています！」と。

先ず気づかされるのは、「童話化」されたものが、原訳より長くなっていることである。《》を附した箇所は、どちらか一方だけに見られる文章であるが、それは「童話化」されたものに多い。更に――をほどこした部分是对応箇所は存在するが、可成り異った対応のしかたを示す部分である。この箇所の文章も「童話化」作品の方が長くなっている。これは次のような理由に基くものと云えよう。即ち、原作の美しい文章は、描写も説明も短かいながら、可成複雑な構文をもっているに比し、「童話化」作品は、構造の簡単な短い文章が単純に重なり合っている、更に、随所に説明が挿入されているために、全体として長くなっているのである。前述の文例から該当

体をのぼして、娘さんは、少しもそれに気がつきません。兄さんのことだけを思っていました。

燈籠は、やがて見えなくなり、燃えながら、向うに行つてしまいました。

どんなに嬉しかったでしょう。娘さんは手を合わせたまま、云いました。

「生きてるわ。生きてるわ。」

声はひびいて向うの森からも、こだまが、それにこたえしました。

「生きてるわ。」

箇所を引こう。

#### ——原作

かわいたのどをうるおして、河からあがつてきた猛獣が、おずおずとかたえをかけぬけて行きます。

#### ——童話化作品

ふと、何ものか慌しくかけ出しました。一頭の大きな鹿でありました。鹿は河のそばに来て水をのもうとした時に、娘さんの足音を聞きつけたのです。

原訳の文章は、二十一語からなる一つの文章である。それに対して、「童話化作品」は、総語数四十二の三つの文章の連りに変えられている。

更に、補足・説明のされている箇所を例にとると次のようなものがある。即ち、ガンジスの美しい流れを挙げただけで物語りの舞台をしのばせる原作に比し、「童話化作品」は「印度という国がある。私はそこまで行ってきた」と説明を加え(①の箇所)、又、少女の行動と心理を描写して、迷信に生きる南の国の人々の生活をほうふつとさせるに對し、「童話化作品」は「といううらないでした」と説明している(②の箇所)。暗示を避け、間接的な表現を廃して直説的説明に改められ、わかり易い平易なものになっているのである。

……を附した箇所は、両者の表現用語の異なる点であるが、「すずかけ」が「バナナ」に、「エヴァのような」が「この世の人ではないような」に、そして「おもうひと」が「兄さん」に変つている。バナナは我が国の子供達にとって、熱帯と最もよく結びつき、親しみのある植物である。エヴァは、理解し得ない名詞として、童話から省かれたのであろう。最後の「兄さん」への変化であるが、これは思春期の少女の恋心を描いたこの原作を、兄を想う妹の祈りへと

変容させてしまっている。

浜田ひろすけは、幼児と共に歌い共に楽しむ善意の作家と云われ  
ている。この作者の心づかいが細やかに行きわたっているのが前掲  
の例にもみられるように思われるのである。

次いで今一つの例を鈴木三重吉の「童話化」にとろう。三重吉は  
近代児童文学の祖とよばれるが、純粹の創作は比較的少く芸術性の  
高い美しい再話が多い。彼の再話には創作以上の苦心が払われ  
ている。具体的な例としてドーデーの短編「スガンの山羊」の  
「童話化」を引こう。これは詳細な比較は省くが内容を著しく変え  
ているような箇所はない。ただ原作にある序の部分「グランゴア  
ル君に与える教訓」の部分省かれていた程度である。

文章は平易に単純な構造になり、原作の変化に富んだ描写法が素  
直な平板な説明調になっている。次に一例を掲げる。

——原訳（桜田佐訳）

ああ、グランゴアル君、実  
に美しい奴だったよ。このスガ  
ンさんの山羊は！ 優しい眼、  
下士官風のおごひげ、黒くて光  
っている蹄、縞模様の角、それ  
に長い白毛の襦褌でその綺麗な  
ことと云ったら！

——三重吉童話化

今度の山羊は全くいい山羊で  
した。それにこやかな目とい  
い、下士官のようなおごひげと  
いい、黒くてつやのあるひずめ  
といい。まだらもようのある角  
といい、外套の代りをしている  
白い毛など、全てがいかにも可  
愛く出来ていました。

転例や名詞止めを豊富に用いた原作の印象的な描写法が、非常に  
生き生きと文に迫力を与えているに比し、童話はより落ち着いた平  
凡な説明調に変わっている。

次に示す部分も差異のみられる箇所である。

——原訳（桜田佐訳）

……そればかりではない——  
これは君と僕の聞だけのことだ  
よ、グランゴアル君。——一  
匹の黒い毛色の若い羚羊は、運  
よくブランケットの気に入った  
らしいのだ。二人の仲良しは、  
一時か二時の間、林を縫って彷徨  
し歩いた。若し二人の云い交  
したことを知れたければ、昔の  
下をこっそり抜けていく、あの  
おしゃべりの清水に聞いて見給  
え。

——三重吉童話化

白山羊は、その中にある一匹  
の黒毛のかもしれないとおも  
つて、一、二時間森の中をさま  
よい歩きました。白山羊が、そ  
のおともを相手に、得意になっ  
てどんなことを云ったか、それ  
が知りたければ、あのこげの下  
を、姿をみせずに流れている、  
おしゃべりの泉の所へ行つてお  
聞きなさい。

原作が若く美しい牝山羊の抱いたかりそめの感情を描いているの  
に比し、「童話化」作品は皆に賞めそやされて得意になる子供のよ  
うな無邪気な高慢さを示す情景に変わってしまっている。

児童に芸術的な物語を与えることを高唱し、品性・趣味の向上を  
計り、文章水準の引き上げを意図した彼の「童話化」は、平易で理  
解し易いように変えられながらも、きめの細い美しさを失わない文  
章にその面目をよく示している。そして、牝山羊の愛の戯れを子供  
らしく変容した所に、彼の児童への配慮が現れていると云えよう。  
ここに、二人の作家を例にとって「童話化」を考えてきた。作家  
達は、筆の力で文字を媒介として児童と接触しているだけに、「童  
話化」において先ずみられるのは用語の平易化と文章構造の単純化  
であり、次いで内容・表現の児童化がなされている。

然し、原作の持つニュアンス・味わいは出来る限り保存しよう  
とする傾向がみられる。これは、作家の意図が芸術作品を児童の世界  
に浸透させようという点にあることを示すものである。更に、芸術  
性の強調は変容の仕方・文章の扱ひ方に現われるばかりでなく、作  
品素材の選択をも規定するのである。

（未完）